

〔新刊書評〕

三部倫子 著
カムアウトする親子—同性愛と家族の社会学—
 御茶の水書房, 2014年

松 井 由 香

近年、新聞、テレビなどのメディア情報をと
 おして、レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル
 (以下、LGB と記す) などのセクシュアルマイ
 ノリティの人が直面する困難や、学校・職場な
 どで求められる配慮について特集した記事や番
 組が散見されるようになった。しかし、現実の
 社会で、LGB の人たちがさまざまな「生きづ
 らさ」を感じながら生活しているということを、
 私たちはどれだけ自覚しているだろうか。

本書は、著者が2011年度にお茶の水女子大学
 に提出した博士学位論文『レズビアン・ゲイ・
 バイセクシュアル「家族」の質的研究—可視性
 をめぐるジレンマと親子の相互行為—』をもと
 に、より多様な読み手を想定して大幅に改稿さ
 れたものである。タイトルが示すように、本書
 は「同性愛の子ども」と、「異性愛者である親」
 との間で行われる「カムアウト」と、それを契
 機に問い直される親子関係を主題としている。
 しかし、本書を貫く問いは、両者の親子関係に
 留まるものではない。著者は本書の問いを次の
 ように述べている。

「LGB などのセクシュアルマイノリティ、か
 れらを産み育てた親を日本社会はどのように
 扱っているのだろうか」(「はじめに」 iii)

このように、本書の最大の特徴は、LGB の
 人とその親が抱える苦悩や「生きづらさ」の原
 因を個人に求めるのではなく、社会との関係性
 のなかに見出している点にあり、副題にあると
 おり「同性愛と家族の社会学」たるゆえんであ
 る。LGB を対象とした国内の研究は極めて少
 なく、また、かれらの親子関係や家族に注目し
 た研究は管見する限りでは見当たらない。その

意味で、本書は国内におけるセクシュアルマイ
 ノリティ研究と家族研究とを架橋し、新たな視
 座を拓く先駆的な一冊であるといえる。

本書は、「Ⅰ部 理論と方法」と、「Ⅱ部 子
 どもが経験するスティグマと対処」、「Ⅲ部 親
 が経験する縁者のスティグマと対処」のⅢ部構
 成となっており、その章立ては次の通りである。

はじめに

第Ⅰ部 理論と方法

1 章 カムアウトする親子を考えるために

2 章 調査方法

第Ⅱ部 子どもが経験するスティグマと対処

3 章 友達への／からのカミングアウト

4 章 親へのカミングアウト

第Ⅲ部 親が経験する縁者のスティグマと対処

5 章 子どもからのカミングアウト

6 章 「縁者のスティグマ者」になる親

7 章 カムアウトする親子

終章 差異ある他者とどう生きるか

1 章では、おもにアメリカやイギリスにおけ
 る研究を中心に、LGB と異性愛者の親を対置
 してきた先行研究を批判的に検討している。
 LGB を対象とする従来の研究においては、異
 性愛規範社会に生きる LGB は、自ら産まれ育っ
 た異性愛の家族(「定位家族」)のなかで苦悩し、
 そこからのオルタナティブとして新たな「家族」
 (「選び取る家族」)を形成するとみなされてき
 た。著者はここで、親をはじめとする定位家族
 の LGB に対する抑圧面を強調し、LGB と異性

愛家族を対立させて捉える研究に疑問を呈している。そのうえで、欧米に比して同性の恋人関係を保障する法制度が整っていない日本の現状では、LGBが「生活での危機的状況において、定位家族に依存せざるをえない」(11) 状況にあること、さらに、かれらが異性愛家族を必ずしも抑圧者としてとらえていないことを指摘し、「異性愛家族を生きる人間としてLGBを捉えなければならない」(11) と述べる。そして、「異性愛の定位家族のなかにLGBが『いる』ことに『気付く』契機」としてカミングアウトを取り上げることの意義が示されている。著者はカミングアウトの相互行為性に注目し、カムアウトする子どもと、される親双方の視座を交ねることで、親子の問題経験の共通点を可視化し、かれらをスティグマに苦しむ当事者として再定位することの必要性を指摘している。

2章は、著者が5年にわたって実施してきたフィールドワーク（LGBとその親が集うセルフヘルプグループでの参与観察と、かれらを対象としたインタビュー調査）の概要が整理されている。このなかで、近年の「当事者」をめぐる議論をふまえて、本書が誰を「当事者」として設定するのが明示されている。著者はニーズ主体の当事者論では包摂しきれない人々がいることを指摘し、「問題経験を抱えている人」を当事者とする本書の立場を示している。さらに、実際の調査場面での研究者／調査者としての「私」と協力者との関係性や、そこで得られた「データ」の中で「自己」をどのように呈示させるのかについても言及している。本章は、調査の計画から実施、その後の分析の仕方に至るまで、その全容がコンパクトかつ丁寧に整理されている。インタビューや参与観察など質的調査の経験者だけでなく、これから調査を実施したいと考えている初学者にとっても多くの示唆を得ることができるだろう。

つづくⅡ部以降が本書の核となる実証研究部分である。各章の冒頭では、章ごとの内容を象徴するような語りが引用されており、読者を引きつける工夫がなされている。

「Ⅱ部 子どもが経験するスティグマと対処」では、子どもの視点から、かれらの友人関係（3章）と親子関係（4章）を分析している。

3章は、Goffmanのスティグマ論をはじめとする先行研究をレビューした後で、LGBへのインタビューデータと、異性愛者とセクシュアルマイノリティの両者が集う「ot会」への参与観察データを順に検討している。インタビューの分析では、異性愛者との間でLGBが日々経験している可視性をめぐる困難に着目し、「ot会」以外の日常生活において、LGBが異性愛者とみなす人々にどのような想いを抱いているのかを析出している。次に、「ot会」での異性愛者とLGBとの対面的相互行為に着目し、LGBが異性愛者に対して抱くイメージをどのように変容させ、両者がいかなる関係性を築いているのかについて考察を行っている。

4章は、LGBが異性愛者の親との間での経験をどのように捉え、意味づけているのかを分析している。このなかで、親への可視化の契機となるカミングアウトからみる「理解」のありようとそれをめぐる葛藤について検討している。さらに、あるゲイ男性の事例を通して、LGBが置かれている日本社会の現状を示し、親からの承認を求めながらも、それが実現しなかった場合には親との関係性を調整する姿が描かれ、LGBである子どもと異性愛者の親との非対称な関係性が指摘されている。

「Ⅲ部 親が経験する縁者のスティグマと対処」では、これまでほとんど取り上げられることのなかった、子どもからカムアウトされた親が登場する。

5章では、親へのインタビューデータをもとに、子どもからのカミングアウトへの対応について、カミングアウト直後を振り返る親の語りに焦点を当てて分析し、かれらの認識の多様性と共通性を提示している。

つづく6章も、親を対象にしたインタビューデータを材料に、子どもの性的指向を理解しようとするがゆえに生じる葛藤を論じている。そして子どもの性的指向にあわせて、それぞれの

認識を変容していく親たちの経験に注目している。著者は、親たちが日常生活における他者との相互行為をとおして、「LGBの子がいる親」として、「縁者のスティグマ」を意識せざるを得ない状況にあることを丁寧に考察している。そして、LGBと同様に親たちも異性愛規範社会のなかで生きづらさを感じながらも、他者からの援助が得にくい、個人の努力で対処しなければならない状況にあることを指摘している。

ここまで、LGBの子どもと異性愛者の親それぞれの視点から分析がなされてきたが、7章は、LGB、異性愛者の親、友人という多様な立場の人々が集まるグループ「虹の会」が舞台となる。著者は「虹の会」でみられる、異性愛者である「親参加者」とセクシュアルマイノリティである「子参加者」の間で生じる、「あたかも親子であるかのようなやりとり『疑似親子』関係」（202）に注目する。立場の異なる参加者たちの語りの分析をとおして、著者は「会に参加する親参加者も子参加者も、本当は聴いてほしい重要な他者である実の子、実の親に、それぞれの問題経験を語れない。しかし、だからこそ、疑似親子が果たす役割は大きい」（241）と指摘している。そして、会が実親関係では知りえない親、子それぞれの経験、つまり、「親子それぞれが、縁者のスティグマとスティグマに苦しんでいる内実」（241）を参加者に伝える場として機能していること示している。著者は、友人の立場で会に参加している人たちにもフォーカスし、非当事者が会の活動に関わることの意味について論じている。

終章では、各章の内容を振り返りながら、研究の意義と残された課題を示し、本書を結んでいる。

以上が本書の概要であるが、ここで若干の感想を述べたい。先述したとおり、本書は博士学位論文をもとに出版された学術書であるが、より広い読者を想定して大幅に改稿されており、学術書に馴染みのない読者にも読み進めやすい

構成となっている。とくに、用語の説明や、章ごとに配置された注、巻末の索引など、随所に細やかな目配りがなされており、この分野の研究に明るくない読者にとって助けとなるだろう。

そして、本書の最大の特徴であり、魅力でもある点は、3章以降の当事者たちの生き生きとした「語り」にある。かれらの語りは、非常にリアルで切実であり、読み手を圧倒する力をもつ。読者は、語りに登場する「友達」や「会社の上司」、「きょうだい」、「親戚」、「アライさん」などの言動をとおして、セクシュアルマイノリティとその親に差し向けられる「社会のまなざし」を読みとりながら、時にはかれらの姿と自分とを重ねあわせ、また時には自分が著者とともに調査場面に同席しているような臨場感を抱きながら読み進めることができる。そして、読みえ終える頃には、終章で著者が引用するように「マイノリティと無関係な人は誰もいない」（坂本 2005：253）という思いに至る読者も多いことだろう。

繰り返しになるが、本書は、「同性愛の子ども」と、「異性愛者である親」との親子関係を主題としている。しかし、本書を貫く問いは、両者の親子関係に留まるものではない。「差異ある他者」をいかにして“理解”し、そしてともに生きるのかを私たち読み手に問いかける「理解をめぐる社会学」でもあるのだ。本書がより多くの読者のもとに届くことを期待している。

参考文献

坂本佳鶴恵,2005,『アイデンティティの権力—差別を語る主体は成立するか』新曜社。